

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K14252

研究課題名（和文）外国語（英語）の読解指導における音読の役割について

研究課題名（英文）The Role of Oral Reading in EFL Reading Comprehension

研究代表者

藤永 史尚（Fujinaga, Fumihisa）

近畿大学・文芸学部・准教授

研究者番号：60781060

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、外国語（英語）における文章理解を目的とした音読について、黙読と比較しながら考察した。日本人英語学習者を対象とした調査で得られたデータと先行研究から得られた知見あわせて、音読の形態と方法、読み手、テキストタイプ、読み手の内容理解という観点から検討・考察した。音読での内容理解は、音読前に与えられる指示（例えば、音読速度や読んでいる時にどこに注意するかなど）、読み手の英語力、（読後の読解課題で求められる）内容理解の性質によって影響を受ける可能性が示唆された。しかし、テキストタイプの違いがどのように音読時の内容理解に影響するかは明らかにならなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語（英語）における読解において内容理解を目的とした音読が機能しうる条件を整理することによって、テキストの読み方の1つとして、読解指導のなかで黙読と共に音読を活用しうる可能性を示唆した。また、先行研究をその手法的側面に着目して整理することによって、今後の研究への展望を示した。

研究成果の概要（英文）：This study discussed oral reading (or reading aloud) for EFL text comprehension purposes in comparison with silent reading. The findings from an empirical investigation conducted with a group of Japanese EFL learners and an extensive review of related literature were examined and discussed from the following perspectives: form and method of oral reading, reader, text type and reader's text comprehension. It was suggested that oral reading comprehension could be influenced by pre-reading instructions (e.g., on reading speed and attention), the reader's English proficiency and the type of comprehension required by the reading task. However, it was unclear how the text-type difference could affect oral reading comprehension.

研究分野：英語教育

キーワード：音読 黙読 読解 外国語（英語）

## 1. 研究開始当初の背景

一般的に「読むこと」の学習において、読解活動の形態 (reading mode) は「音読」と「黙読」の2つが考えられる。しかしながら、外国語 (英語) 教育の文脈では、「読解 (理解)」のために想定される読み方はもっぱら黙読である。2017、2018 年告示の中学校、高等学校学習指導要領では、音読は「理解したものを表現する手段」とされている。さらに「音読は内容理解とは必ずしも結びつかない」という主張も根強いと言える。現状では、音読に「理解の手段」としての役割は期待されておらず、教室では「黙読等でのテキスト理解→音読」という流れが一般的である。

しかし、母語の読解指導の過程では、発達段階に応じて黙読だけでなく音読も使われるのが普通である。その意味では、母語と外国語の場合とで状況が異なるとはいえ、外国語の読解 (とその指導) においても、「理解の手段」としての音読がどの程度に有用であるのかを検討することは決して無視できない課題であると言える。

この点に関連して、外国語での音読と読解の関係について、音読と黙読のどちらが読解に優位かという観点から検討されてきた。先行研究には、音読あるいは黙読の優位性を示唆するもの、音読と黙読で差がないこと示唆するものが存在し、報告される結果は必ずしも一様ではない。これは、それぞれ実験を行う条件 (読ませ方、求める読解の質など) の違いが一因であると考えられる。しかし、これらの結果について、条件の違いを考慮に入れた議論はまだ不十分であるのが現状である。

そこで、本研究では、理解の手段として使われる音読が行われる「条件」に着目し、読解に与える影響について日本人英語学習者を対象に検討した。

## 2. 研究の目的

本研究では、日本人英語学習者が音読 (声に出して読む行為) を文章理解の手段の1つとして行うことについて、黙読と比較しながら、次の点を研究課題として検討する。

読解 (理解) の手段としての音読がとりうる形態や方法  
そのような音読を活用できるのはどのような読み手か  
どのような文章を読むときに音読が機能しうるか  
音読によって達成される理解の性質

以上を検討することを通して、外国語 (英語) の読解指導において音読をどのような役割を果たしうるのかについての示唆を得る。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の2つの調査から得られた知見を総合的に考察した。

調査 : 関連する先行研究を中心とした文献調査。本研究では、音読と黙読を比較した先行研究の方法的な側面に特に注目しながら、「音読のペース」「音読前の教示 (例: 何に注意して読むかなど)」「読み手 (例: 英語能力や属性など)」「読むテキスト (長さ、難易度、ジャンルなど)」「読解を測る課題のタイプ」を視点として、知見を整理・検討した。

調査 : 日本人英語学習者 (大学生) を研究協力者として、英文を音読・黙読した後、読解課題に取り組んでもらった。先行研究と同様に、音読時と黙読時の読解成績を比較することで、読みの形態が内容理解に与える影響を検討した。

## 4. 研究成果

本研究では、すでに提案されている単語の音読モデル、日本人英語学習者の音読モデルを踏まえ、音読は「視覚入力されたテキストが、文字・単語認識、文処理、理解、構音計画の4つの内的プロセスを経て表出する」と捉えることとした。また、読み手の要因 (英語能力など) とそれ以外の要因 (読むテキストなど) の影響を受けると仮定した。

研究課題 (読解の手段としての音読がとりうる形態や方法) については、教室で行われる一斉の音読よりも個々人が任意のペースで音読する形態の方が読解に適したものであることが示唆された。また、音読中に読み手が内容理解に意識を向けるようにガイドされたり、音声化に過度に注意が向かないように配慮 (例えば、発音の良し悪しに焦点化しないよう教示、発声は読み手自身に聞こえる程度の声で良いことの教示など) されたりする方が良いことが示唆された。

研究課題 (そのような音読を活用できるのはどのような読み手か) に関連して、先行研究に

おいては研究協力者の属性と英語能力以外の情報は特に報告されていなかった。英語能力と読みの形態（音読／黙読）と読解成績との関係については、読解を測る指標が研究間で異なっていることと、読解課題のタイプにも影響を受けることを考慮する必要はあるが、以下のような大まかな傾向を確認した。

- 英語能力が高い場合は音読と黙読に差がないか、黙読の方が読解成績は良い。
- 英語能力がそれほど高くない場合は、音読と黙読に差はないか、音読の方が良い。
- 英語能力が著しく低い場合は黙読の方が、成績が良い。

研究課題（どのような文章を読むときに音読が機能しうるか）と研究課題（音読によって達成される理解の性質とは何か）に関連して、影響する要因として「読む文章のジャンル」と「内容理解を測る課題」に焦点を当てて検討した。先行研究からは、以下のことが明らかになった。

- 内容理解を測る課題は大きくは2つのタイプに分けられ、「文章の情報に関するもの」と「文章で使われた言葉に関するもの」があった。前者には、第一言語による筆記再生テスト、Q&A(選択回答式または自由回答式)の形式が用いられていた。後者については、読んだ文章を使った空所補充の形式であった。これらの課題は、文章を一通り読んだ後に行われ、課題を行う際には文章を見ることはできなかった。どちらかといえば、書かれていることの意味に加えて、それを記憶(保持)できているかどうかまでを求める課題となっていたと考えられる。
- 音読させる文章には、物語文と説明文の両方が用いられていた。長さについては、日本人英語学習者を対象とした研究ではおよそ60-240語程度であった。しかし、このようなテキストタイプや文章の長さは、内容理解に与える要因として特に考慮されているわけではなかった。また、難易度については、研究参加者の熟達度に対応すると推定される文章が選ばれているようであったが、読み手にとっての実際の難易度(「難しかった」のか「容易だった」のかなど)は必ずしも明確ではなかった。

日本人英語学習者(大学生)を対象にした音読・黙読課題(調査)から得られたデータと音読と黙読の比較研究の結果を併せて検討した結果、以下の点が明らかになった。

- 文章を一通り音読または黙読した後に内容理解度を測るとき、選択式の課題の場合には読み方の違いによる差は確認できなかった。
- 記述式で回答を求める課題のうち、Q&Aのような形式では読み方の違いによる差はない傾向があったが、自由筆記再生の形式では、学習者の熟達度の影響も受けて、読み方によって差が出る可能性が示唆された。
- 読解課題回答のために使用される言語が読み手の第一言語か目標言語かは読解成績に影響しうる要因であると推測されたが、実際にどのような影響を与えるのかまでは明らかにすることはできなかった。
- 調査においても先行研究においても読解課題は、遂行中に読んだ文章を見返すことはできなかったため、読み手は内容理解とその記憶保持が求められたと言える。この点を考慮すると、選択式と記述式では前者のほうが記憶保持とそれに関連する認知的負荷が後者よりは少ないと考えられた。これは調査で使用された選択式課題において読み方の違いの影響が顕在化しなかった要因の1つではないかと分析された。
- 音読(または黙読)させる文章の性質が読後の内容理解度にどのように関係しているのかについては、文章ジャンルの違い(物語文と説明文の違いなど)、文章構造の違い、長さの違いによる影響が考えられたが、いずれも一貫した傾向は確認できず、今回の研究では明らかにすることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Fumihisa Fujinaga	4. 巻 32
2. 論文標題 Some methodological issues in studying oral reading as a mode of EFL reading comprehension among Japanese learners	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文学・芸術・文化』	6. 最初と最後の頁 43-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Fumihisa Fujinaga
2. 発表標題 Oral reading as a mode of reading comprehension in EFL: A research review
3. 学会等名 The 24th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------